
2. 入賞作の紹介及び講評

(1) 最優秀賞

〈自由研究部門〉

地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする～“地域まるごとエンパワメント”を目指して～

脇田 和子、都竹 菜美子、津田 安紗美（岐阜県・黒野こども園
子育て支援センター “ゆずりは”）

地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする ～“地域まるごとエンパワメント”を目指して～

岐阜県・黒野こども園子育て支援センター “ゆずりは” 脇田和子・都竹菜美子・津田安紗美

1. 問題と目的

地域子育て支援拠点事業（以下、拠点事業）は、地域における子育て力向上を目的に平成19年度から開始された。平成26年に地域子育て支援拠点事業要綱が定められ、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」「子育て等に関する相談、援助の実施」「地域の子育て関連情報の提供」「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施（月1回以上）」の4つを基本事業として、地域の実情に応じ、地域に開かれた運営を行い、関係機関や子育て支援活動を実施する団体等と連携の構築を図るための取組を実施する（厚生労働省、2021）ことが求められている。

橋本（2011）は拠点事業の現状が既存の専門性や機能の機能の範疇における実践の充実にとどまっていることを指摘し、運営主体や従事者の認識枠組みの転換を指示する仕組みの構築が急務だと述べている。そしてその際、子育ての不安感の軽減だけでなく、潜在力の発揮や主体性の尊重といった親自身をエンパワメントするという視点（中谷、2014）や、少子化に対する対策ではなく「子育ての社会化」に対する対策という視点（木脇、2012）が必要だと言う。しかし、そのような認識枠組みの転換を実際にどう実現するのかという実践モデルは十分に蓄積されていない。新型コロナウイルス感染対策によって拠点事業の活動が大きく制限される中、具体的な方法の選択肢を増やしていくことは重要だと考える。

当センターは岐阜市の大規模園（園児360名）内にある連携型の子育て支援センターである。園のシンボルツリーから“ゆずりは”と名付け、岐阜県第1号として開設して今年で28年目となる。時代の流れと共に「親自身のエンパワメント」や「子育ての社会化」という認識枠組みを持ちつつも、活動としては従来の枠組みの中での充実には留まっていた。しかし、令和2年9月より筆者らスタッフ3名で新体制を組んだことを機に、従来の枠組みを超えた大胆なチャレンジを試みてきた。その結果、地域資源と子育て親子の繋がりが次々と生まれつつある。

そこで本稿では、当センターの約1年間の試みの整理を通して、地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする仕組みを図式化し、拠点事業における実践モデルのひとつとして提示することを目的とする。

2. 方法

子育て支援センター“ゆずりは”（以下、“ゆずりは”）における令和2年9月から令和3年10月までの試みを、

「地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする」という視点でステップA・B・Cに分類して記述する。

【ステップA】“ゆずりは”と子育て親子を繋げる

- 1) わくわくする交流プログラムの企画・運営
 - ①30分という短時間のプログラムを、午前10時半～と午後1時半～の2回、月～金のほぼ毎日実施する（表1）。原則親子5組の予約制とする。
 - ②地域講師や地域店舗、こども園職員等の地域資源にも積極的にアウトソーシング（表1のダークグレー）して、多彩で魅力的なプログラムを企画・展開する。
 - ③非常事態宣言による休室期間中もZOOMやインスタライブを行う（写真1）。造形プログラムは事前にキットを配布し、当日画面を見ながら一緒に製作できるようにする。また、気軽に参加できるように途中入室・退室OKと呼びかけ、参加児のペースに合わせたり、分かりやすい画面を意識したりして進行する。
 - ④プログラムは静動・緩急等のメリハリ、子ども向けと大人向け活動のバランスを調整し、和やかな雰囲気大切にしながら進行する。また、各プログラムの始まりと終わりはいつも同じ歌を歌ったり、参加者に合わせて即興演奏を加えたりして、子どもに分かりやすい環境創りに音楽の力を活用する。
 - ⑤年度末に『ありがとうWEEK』、年度開始に『ウエルカムWEEK』（表1左上）を設ける。感謝や期待を共有し、次年度継続の手続きをする機会とする。

2) いつでも誰でも利用できるサポート体制の確立

- ①支援室開放は平日10時～12時と13時半～16時とし、おむつ替えや授乳スペースを提供する『岐阜県赤ちゃんステーション』としても登録し、広く地域に開放する。また、いつでも身体測定できるように身長計と体重計、毎月の成長を記入する“ゆずりは”オリジナルの「すくすくカード」を常備する。さらに、駐車場までのアクセスや支援室の利用方法を分かりやすく動画や画像にしてSNSにアップする。入口にはウエルカムボード（写真2）、室内にはフォトブースを設け、登録者には年齢マーク付きのオリジナル名札を常備する。また、園庭開放は平日9時半～12時、13時半～15時、土曜日は9時半～13時とし、子育て相談と図書貸し出しは平日の10時～16時とする。園職員は誰でも対応できるように周知しておく。子育て相談は休室時でも電話や

ZOOMで対応する。

- ②毎回交流プログラム後1時間程度は、引き続き支援室開放で交流できるようにする。何気ない会話をもちか

けてユーモアや本音を出しやすい雰囲気を作り、様子を見ながらじっくり話を聞いたり、参加者同士の会話に繋げたりする。

表1 “ゆずりは” 交流プログラム (例)

黒野こども園子育て支援センター” ゆずりは” R3. 4月 交流プログラム

| | 5月 | 6日 火 | 7日 水 | 8日 木 | 9日 金 | 10日 土 |
|----|---|---|--|---|---|----------------------------|
| 午前 | | | 10:30~11:00 親子ベビータッチ | 11:00~12:00 English For you inホール | 一日撮影会 10:00~12:00 inホール | 支援室開放 9:30~13:00 |
| 午後 | | | 10:30~11:00 inホール こども劇ってどんなとこ? | 支援室開放 10:00~12:00 | 支援室開放 10:00~12:00 | |
| | | | 3:30~14:00 【フリー】 おはなしひろば | 14:00~14:30 zoomでリトミック | 一日撮影会 13:00~15:00 inホール | |
| | | | 支援室開放 14:00~16:00 | 支援室開放 14:30~16:00 | 支援室開放 13:30~16:00 | |
| 午前 | 12日 【コアラ】 ゆずりは ウェルカム① 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 13日 【コアラ】 ゆずりは ウェルカム② 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 14日 【コアラ】 10:30~11:00 【ゆずママ】 すくすくカード作り | 15日 【カンガル】 ゆずりは ウェルカム③ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 16日 【ペンギン】 ゆずりは ウェルカム④ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 17日 支援室開放 9:30~13:00 |
| 午後 | 13:30~14:00 【フリー】 おはなしひろば | 13:30~15:00 手形足型アート | 13:30~14:00 【ゆずママ】 すくすくカード作り | 支援室開放 11:00~12:00 | 支援室開放 11:00~12:00 | |
| | 支援室開放 14:00~16:00 | 支援室開放 15:00~16:00 | 支援室開放 14:00~16:00 | 支援室開放 13:30~16:00 | 13:30~15:00 美濃焼タイルアート | |
| | | | | | 13:30~15:00 骨盤体操inホール | |
| 午前 | 19日 【カンガル】 ゆずりは ウェルカム⑤ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 20日 【ペンギン】 ゆずりは ウェルカム⑥ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 21日 10:30~11:00 ベビーマッサージ | 22日 【コアラ】 ゆずりは ウェルカム⑦ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 23日 【コアラ】 ゆずりは ウェルカム⑧ 歌ったり踊ったり お話ししたり・・・ | 24日 支援室開放 9:30~13:00 |
| 午後 | 13:30~14:00 【フリー】 おはなしひろば | 13:30~14:00 【フリー】 カラービニバックあそび | 支援室開放 11:00~12:00 | 支援室開放 11:00~12:00 | 支援室開放 11:00~12:00 | |
| | 支援室開放 14:00~16:00 | 支援室開放 14:00~16:00 | 支援室開放 13:30~16:00 | 支援室開放 15:00~16:00 | 支援室開放 14:00~16:00 | |
| 午前 | 26日 カラービニバック遊 10:30~ inメディコス 支援室開放 10:00~12:00 | 27日 10:30~11:30 【ゆずママ】 inホール 親子ダンス by太田奈美先生 | 28日 10:30~11:30 アルバム作り | 29日 昭和三十九年 | 30日 じっくり育児相談 (予約制) | 支援室開放 9:30~13:00 |
| 午後 | 支援室開放 13:30~16:00 | 10:00~12:00 ベビーマッサージ あひ遊び in支援室 | 支援室開放 11:30~12:00 | | 支援室開放 11:00~12:00 | |
| | | 13:30~14:00 【フリー】 おはなしひろば | 支援室開放 14:00~16:00 | | 午後閉室 | |



写真1：非常事態宣言中のプログラム (インスタ)



写真2：ウェルカムボード

3) 個別連絡システムの構築

- ①交流プログラムの予告は通信やホームページから徐々にインスタグラムとラインに、予約受付は対面・電話・メールから徐々にラインに1本化できるようにする。また、毎月最終週に次々月のプログラムを公表し、次月1～4日に予約をとり、毎月5日に全予約者に抽選結果を通知するというサイクルを定着させる。抽選漏れが多いプログラムはできる範囲で追加設定し、すぐに連絡する。また、後日にキャンセルで空きが出た場合もすぐに「残〇名」と現況をアップする。
- ②SNSに慣れていない家族のために、登録方法や予約方法、ZOOM利用方法をアップしたりお試し体験の時間を設けたりして、誰でも参加できるようにする。

【ステップB】“ゆずりは”と地域資源を繋げる

1) 地域資源への積極的なアプローチ

- ①パンフレット設置依頼：公共施設や地域店舗等を1軒ずつ訪ね、施設の概要、利用者の声、スタッフの想いを伝えながらパンフレット（写真3）の設置を依頼し、相手先のチラシ等も“ゆずりは”に設置可能であることを伝える。

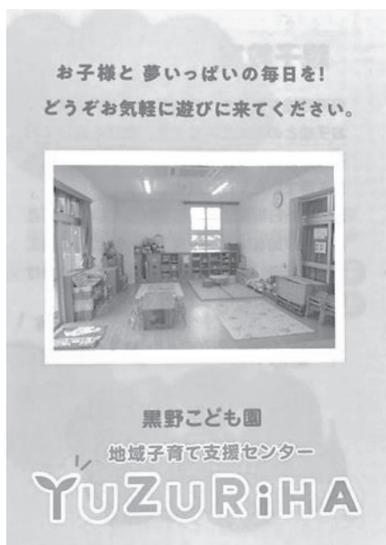


写真3：“ゆずりは”パンフレット

- ②コミュニティスペースの利用者を募集：「親子連れでセミナーができる場所を探している、ママが参加中の子どもたちと遊んでほしい等、“ゆずりは”がママとの架け橋となるよう協力します」と呼びかけ、応募者からの企画や内容を把握して許諾を決定後、具体的な打ち合わせをする。
- ③セミナー講師を依頼：スタッフと交流があり、信頼できる講師にセミナーを依頼する。少数対象の講座は支援室で、大人数対象の講座は園ホールで行う。
- ④同業種交流：「コロナ渦における活動の工夫や悩みを交流しませんか」と子育て支援施設や個人に呼びかけ、訪問やZOOMで交流（写真4）をする。



写真4：同業種交流（ZOOM）の様子

- ⑤マルシェへの出店：近隣でのマルシェに出店した個人や店舗、地域店舗に“くるの親子マルシェ”への出店を呼びかけ、出店希望者と交流する。

2) 地域資源とのコラボレーション

- ①NPO法人：『ぎふウイメンズフェスタ』等の企画の一部を担当し、内容について打ち合わせ後、当日の企画・進行（写真5・6）をする。



写真5：NPO法人とのコラボ企画『えほんのひろば劇場』の進行の様子



写真6：NPO法人とのコラボ企画『親子でカラービニパック遊び』のポスター

- ②公共施設：岐阜市メディアコスモスに市民団体登録をし、月1～3回、出張プログラムを行う。また、市役所新庁舎の市民交流広場“ミンナト”でのプログラムを企画し、関係者各位に見学参加を呼びかける。
- ③会社：“ゆずりは”の広報備品を地域の制作会社に依頼したり、交流プログラムをイベント企画会社（写真7）や絵本会社と企画・進行したりする。
- ④店舗：“ゆずりは”を通してテイクアウトの予約注文ができる『KURONO Project』への参加を地域店舗に呼びかける。また、“ゆずりは”に出張できる写真館を募集し、子どもに優しい「一日撮影会」（写真8）を企画する。
- ⑤地域講師：コミュニティスペースでの講座がスムーズに進行するように、講師と参加者の会話を繋いだり、保護者が講座に集中できるように子どもと遊んだりする。講師をフォローしながら、講座での学びも吸収する。
- ⑥黒野こども園職員：交流プログラムの一部を保育教諭・栄養士・看護師・ベビーマッサージ有資格者・校務員等が担当する。また、主幹教諭が「こども園ってどんなどころ？」の講座を担当する。

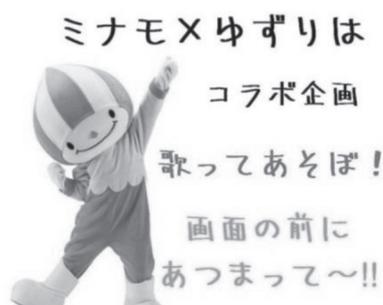


写真7：会社とのコラボ企画(インスタ)



写真8：店舗とのコラボ企画『こどもに優しい一日撮影会』の様子

【ステップC】地域資源と子育て親子を繋げる

1) 直接的に繋げる

- ①コラボ企画：子育て親子が、地域資源が企画進行する交流プログラムに参加したり、出張プログラムを行う公共施設に出かけたり、地域店舗のテイクアウトを利用したりして、地域資源と直接触れ合う機会を設ける。また、黒野こども園においては、同年齢クラスの保育を親子で体験する「プレイフルツアー」、幼児クラスの園児と遊ぶ「ジョイナス」、保護者向けに「こども園ってどんなどころ？」の講座を行ったり、職員が交流プログラムを担当したりして、在園児や保育教諭と直接触れ合う機会を設ける。
- ②“くろの親子マルシェ”（写真9・10）：親子が地域の店舗や講師と、出店者が親子や園職員・在園児と直接ふれあい、交流できる機会を設ける。

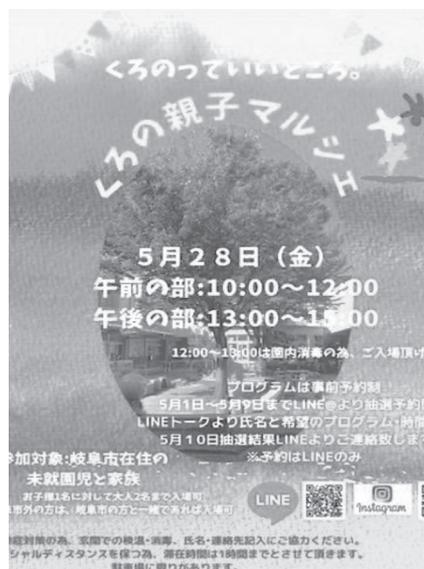


写真9：『くろの親子マルシェ』のポスター



写真10：『くろの親子マルシェ』の様子

2) 間接的に繋げる

- ①交流プログラムや支援室・園庭開放時に、スタッフと子育て親子が地域に関する情報を伝達し合う。また、スタッフが地域資源にアプローチしたり交流・コラボ

したりする時に、子育て親子や地域に関する情報を伝達し合う。

- ②インスタ：“ゆずりは”を介して知った地域の魅力的な店舗や会社の情報を子育て親子が得られるように、地域資源が“ゆずりは”のインスタグラムから子育て親子の情報を得られるように、ニーズに合わせてインスタグラムの閲覧情報を提供する。

3. 結果（令和、以下R）

【ステップA】“ゆずりは”と子育て親子の繋がり

1) “ゆずりは”利用者登録数

R2年度の9月度67組、2月度121組、3月度159組、R3年度4月度125組（卒室による減少）、7月度170組、10月度225組と増加傾向にある。

2) “ゆずりは”交流プログラムへの参加数

R2年9月度は49組だったが、R3年7月度には307組と増加した（R3年2～6月と8～9月は緊急事態宣言による休室が含まれるため比較不能）。

3) “ゆずりは”ライン登録数

R3年4/3現在160人が、R3年10/31現在474人と増加した。

【ステップB】“ゆずりは”と地域資源の繋がり

1) “ゆずりは”から地域資源へのアプローチ

R3年10月末までに連携した地域資源は合計129カ所であった。連携先は子育て支援センター等の同業種15、自治体施設12、NPO法人5、病院・医院10、講座講師14、会社8、店舗63、その他2、連携内容はパンフレット設置67、対面やZOOMでの対話交流40、セミナー講師依頼11、コミュニティスペース利用11、マルシェ出店への応募37であった。

2) 地域資源とのコラボ企画

- ①NPO法人：リトミックやベビーマッサージ等のステージイベントを12、ホールでの『えほんのひろば劇場』を4、毎月1回開催の『親子でカラービニパック遊び』を4の合計20プログラムを担当した。
- ②公共施設：リトミックやベビーマッサージ等のプログラムをメディコス会場で8回実施した。市民交流広場では11月に2プログラムを実施予定である。
- ③会社：“ゆずりは”のパンフレットやポスター、スタッフTシャツの作成を地域の制作会社に活動を理解してもらいながら依頼した。また、交流プログラムの一部を岐阜県のゆるキャラ“ミナモ”と7回、フレーベル館の絵本アドバイザーと2回、一緒に企画・進行了した。
- ④店舗：『KURONO Project』として近隣の日本料理店のTAKEOUT弁当販売や、いちご栽培農家のイチゴパ

ック販売、写真館の一日撮影会を3回実施した。

- ⑤黒野こども園職員：交流プログラムの「おはなしひろば」「ぞうけいひろば」「ベビーマッサージ」「給食体験」等を保育教諭が、「離乳食」「クッキング」等を栄養士が、「すくすく相談」等を看護師が、「マジックショー」を校務員が、「こども園ってどんなところ？」等を主幹教諭が担当した。

【ステップC】地域資源と子育て親子の繋がり

1) コミュニティスペースやコラボ企画

コミュニティスペースでの講座に参加した親子は約25組（非常事態宣言発令により実施できなかった講座多数）、NPO法人とのコラボ企画への参加親子は約200組、公共施設とのコラボ企画への参加親子は約100組であった。

2) “くろの親子マルシェ”

第1・2回とも最大制限数15件以上の応募があり、上限30件の出店があった。参加家族は第1回が78組、第2回が110組で、第3回は11月実施予定である。

3) “ゆずりは”のインスタ

平成31年1/22に開設したインスタのフォロワー数はR3年3/6現在1000人、R3年10/31現在1640人と増加傾向にある。

4. 考察

以上の結果より、“ゆずりは”において地域資源と子育て親子を繋ぐ足場ができてつづることが推察された。本実践を基に、地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする仕組みを図式化（図1）し、その仕組みについて考察する。

1) ステップA・B・Cのプロセス

本実践のモデルを以下のように示す。①支援拠点がステップAのインソーシングを充実させ、支援拠点と子育て親子を繋ぐ。②支援拠点がステップBで地域資源へのアプローチを行い、支援拠点と地域資源を繋ぐ。③ステップBで繋がった地域資源のうち、講座を担当できる地域資源にはステップAでのアウトソーシングを、企画や出店ができる地域資源にはステップCでの協働を呼びかける。④ステップCにおいて支援拠点と地域資源が協働し、地域資源と子育て親子を繋ぐ。⑤各循環を促しながら、“地域まるごとエンパワメント”を目指す。

2) ステップA・B・Cの役割

- ①ステップAは基盤：スタッフ主体の短時間プログラムに参加することをきっかけに、子育て親子にとって「安心できる楽しい場」となるかが重要である。その際、誰でもいつでもどのような内容でも利用しやすい環境条件をいかにして整えるかが課題となる。ステ

ステップAにおいて支援拠点と子育て親子との繋がりを強固にすることが、全ての活動の基盤になると考える。

②ステップBは要（かなめ）：支援拠点から積極的に地域資源にアプローチし、いかに魅力的な地域資源と出会うことができるかが、その後に地域資源と子育て親子を繋ぐ際の要となる。子育て親子も地域資源もスタッフも皆、お互いにエンパワメントし合うことがステップCへの原動力になると考える。

③ステップCは“地域まるごとエンパワメント”：支援拠点が、ステップAで子育て親子と、ステップBで地域資源と強固に繋がることができれば、ステップCでの協働が多彩になる。どのステップにおいても選択肢を多彩にすることが主体的な参加を促し、エンパワメントに直結すると考える。このような「個別最適化」の考え方は子育て親子だけでなく、地域資源にとってもキーワードになる。また、スピーディーに確実に情報伝達できる「完全SNS化」もこれからの活動には欠かせない。

今後も「エンパワメント」「子育ての社会化」を認識枠組みとする“地域まるごとエンパワメント”を目指し、さらに地域資源との繋がりを強めていきたい。

5. おわりに

新体制発足以来、スタッフの得意を活かしたチームワークを大事にしながら、新しい試みを楽しんできた。大胆なチャレンジを見守り、応援してくれる園風土がありがたく思う。これからも地域に触れ、地域を感じ、地域と繋がっていくことで、ひとりひとりがわくわくできる世界を広げていきたい。

引用文献

- ・橋本真紀（2011） 地域を基盤とした子育て支援実践の現状と課題—地域子育て支援拠点事業センター型実践の検証から—社会福祉学第52巻第1号41-54
- ・木脇奈智子（2012） 多様化する「子育て支援」の現状と課題—新たなニーズとそれに対応する事例から—藤女子大学QOL研究所紀要第7巻第1号37-43
- ・厚生労働省（2021） 地域子育て支援拠点事業の実施について（五次改正）
- ・中谷奈津子（2014） 地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化—支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して—保育学研究第52巻第3号9-21

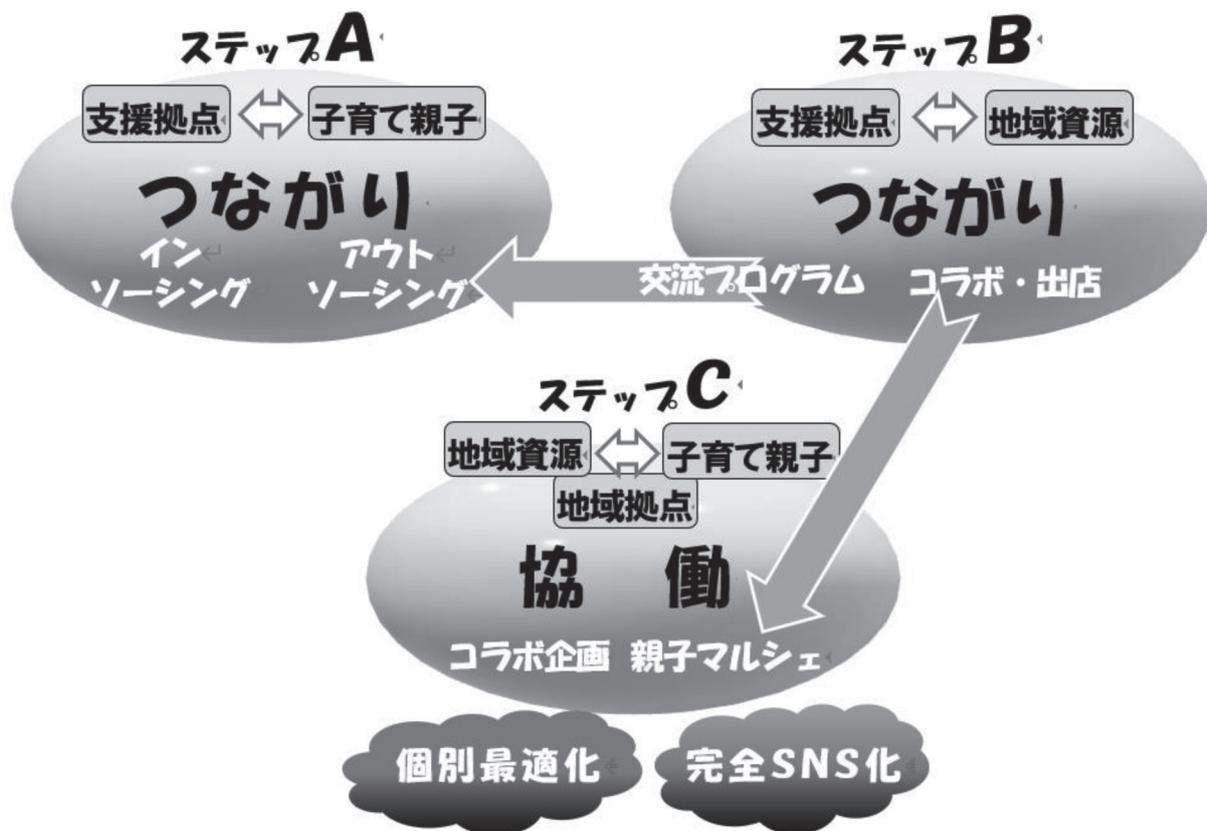


図1 地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする仕組み

講評：地域資源と子育て親子の繋がりをプロデュースする
～ “地域まるごとエンパワメント” を目指して～

評者：小林 芳文

本研究では、子育ての社会化という、今、わが国で抱えている子ども支援の課題に向き合うしっかりとした研究の問題提起であり、論点や方法も明確に示されている読み応えのある研究でした。

子育て支援センター“ゆずりは”での役割を、地域資源を生かした子育ての取り組みの活動実績として、特に他機関とのコラボレーションに視点を置いたことが触れられており、地域まるごとエンパワメントのテーマとの結び付きが伝わってきました。強いて言えば、そのエンパワメントを示すために、子育てに関わる利用者などの反応、意見、感想などを含めた調査、アンケートの結果があれば、より重みのある研究になると思われました。

これからの取り組み、実践のさらなる研究報告を期待しています。

評者：石川 昭義

地域子育て支援拠点事業の活動実績が、ステップA・B・Cという発展的な区分としてわかりやすく示されており、同種のセンターにとって参考となる実践モデルといえます。

冒頭の「問題と目的」にあるように、まずは「認識枠組みの転換を実際にどう実現するのか」という問題提起を行い、「従来の枠組みを超えた大胆なチャレンジ」の気持ちを持って、実践に取り組んだことは評価できます。ステップA・B・Cと進むにつれて、様々な地域資源と親子のつながりが広がっていく様子が伝わってきました。利用者登録数や参加親子の人数など、客観的な数値を示せたこともよかったです。

「大胆なチャレンジ」はスタッフ3名という体

制で行ったということで、職員の苦労や悩みが盛り込まれるとよかったです。また、改革の前後での違いを明確にする工夫として、「エンパワメント」等の具体例を提示したり、連携先の地域資源または利用者の感想が盛り込まれたりすると「子育ての社会化」の意義がより理解されやすくなったと思います。

評者：日吉 輝幸

黒野こども園子育て支援センター“ゆずりは”では、子育て支援センターとしての役割をステップA・B・Cと3つに分類しており、Aはセンターと親子、Bはセンターと地域資源、Cは地域資源と、親子とそれぞれの繋がりを基にした活動であり、そのいずれもが利用者や地域のニーズに合致していることが良いと思われました。また、施設内対応が一般的な保育所等における子育て支援事業ですが、地域資源を積極的に活用した取り組みが秀逸だと思われました。

しかしながら、「実践研究レポート」としての体裁を考えた時に、文末に示した図解や写真が本文中にあれば、より活動内容が理解しやすくて良かったのではないかと思います。

黒野こども園子育て支援センター“ゆずりは”の、運営にあたっての高い志や実践内容は、保育所等に併設されている子育て支援センターの域を超えているのではないかとさえ思われ、“地域まるごとエンパワメント”という視点とその先駆的实践内容は称賛に値するものと思われました。今後も地域に根差した活動を継続されていかれることを期待しています。

